

家族再生のために

林 郁

作家

さまざまな生老病死、わが苦楽をかえりみるにつけ、個人と家族、ひとりを生きながら、人と共に生きる道、家族の変化・成長を考えます。

わたしは母子家庭の末っ子で、病弱な子でしたから、母や姉、同居の他人やご近所、看護婦さんなどたくさんの人に育てられました。外でいじめられても家に逃げ帰ると安心、という感じでした。それで今でも「家庭は避難所」「血縁でなくても助っ人が家族」だと考えています。

18歳で地方から上京、独立した時は、こんな自由があったのかと喜びました。けれど怪我や流産などで動けない時は惨めでした。当時は電話がなかったので、^{たす}援けを求めることができず、苦痛と不安に耐えて寝ていました。何度か病気をしましたので、缶詰や薬の用意、隣りとの付き合いなど自助の工夫を覚えました。

結婚して夫婦と子ども2人の核家族になってからはただ夢中でした。激務の夫に頼れず、「わたしが倒れたら家庭は惨状、丈夫になれ！」と自分を叱って生きてきました。で、入院は二度のお産の時だけで、わたしは年々丈夫になりました。

夫は怪我や病気で5回入院しました。その時は悲しみましたが、家族の結束は強まり、私は考え直しました。病いや障害は家族を育てると。

しかしわたしは原稿書き、取材、講演、会合などで多忙になり、家族問題を書きながら家族と過ごす時間がなくなり、悩みました。気がついたら自分が男以上の働き蜂になっていたのです。

更年期に身内や母のあいつぐ死、母の死を悲しんでいる最中の離婚。そこに仕事の難問、家さがし、引っ越しなど。この5年は疲れと受苦に耐える日々でした。

去年はウツから言語失調になり、家族のありがたさが身にしみました。「人生は何が起こるか分からない。だから家族は危急の時、苦しい時に支え合う存在」だと改めて深く実感しました。

今回は同居の息子と娘、友だちに援けられ、まず信じること、思いやること、と当たり前のことをかみしめています。

樹の下で瞑想し、草花を育て、絵を描き、音楽を聴き、祈る。老人ホームのお手伝いから学ぶ。旅をする。そういう癒しの時間が生まれて初めて持てるようになったことにわたしは感謝し、重い老病人の介護や育児と仕事の両立で奮闘している人を思います。女一人で両方背負うのは大変な時代だと、顧みて、友を見て、思うのです。

家庭内暴力、家庭内離婚、嫁と姑・舅のいがみ合いなども知らされます。こういう負の現実が反省や人の支えで好転しますように。

今年は「国際家族年」です。「社会の中核に家族というデモクラシーを築こう」がテーマで、家族は多様だから、国が「理想の家族」の押しつけをしないという申し合わせだそうです。日本でも「血縁三世代家族が正常だ」と決めつけず、一人家族や友人家族、事実婚などいろんな生き方を認め、現実のニーズに添えていただきたいものです。

家族は形でなく、中身です。国際家族年もイベントではなく、私たちの中身です。中身は成長します。

あなたは本当に幸せですか。あなたは家族を犠牲にしていますか。親切のつもりで子を抑圧していませんか。と私は自問し、いや、そんな大まじめにならなくても、独りもよし、人と生きるのも嬉しい。バツイチ体験から得たこの包容力で家族再生は可能だと笑顔で思ってしまうのです。